

ロシアと日本：民俗文化のアーキタイプを比較して

Notes on Comparison of the Russian and Japanese Ethno-Cultural Archetypes

アレクサンドル・プラーソル*

論文の要旨

人類の起源に関する学術知識が深まるにつれて、世界の文明がどう係わりあっているかという問題に対する民俗学者の興味が高まっていく。将来はいわば人類の社会的ゲノムマップの作成が次の課題になるだろう。本論はこのグローバル的課題の一面であるロシアと日本の民俗文化・民族性格の類似点と相違点を論じている。西洋民俗学の視点からみればロシアと日本は集団主義文化圏に属し、その他にも類似点が多い。しかし西洋個人主義の基準をさておくとすれば、両国の民俗文化は違いが多く同種であるまい。本論では両文化の比較分析は1)文明のレベル 2)国の社会政治的組織のレベル 3)日常生活における個人の行動のレベルで行われる。

人類の起源に関する学術知識が深まるにつれて、さまざまな文明がどのように形成されてきたか、世界の文明がどう係わりあっているかという問題に対する民俗学者の興味が高まっていく。現在は、研究を重ね、データ資料を蓄える段階で、将来はいわば人類の社会的ゲノムマップの作成が次の課題になるだろう。人類を構成する世界文明や民俗文化の比較分析がその中心になるだろう。本論はこのグローバル的課題の一面であるロシアと日本の民俗文化・民族性格の類似点と相違点を論じている。ロシアではこのタイプの論文が見られるが¹、研究がまだ初段階にあると言っても過言ではあるまい。ロシア文化を研究する日本学者はまだこのテーマに着手していないようだが、ロシア人と日本人の行動パターンに関する実際の観察を紹介する少数の論文を挙げることができる²。

ロシア文明と日本文明は個別的な文明として識別され³、両方とも外国から受け入れた部分が多い。日本文明は上代に中国文明とインド文明、近・現代にユーロ・アメリカ文明に強く影響されて形成されてきた。ロシアはビザンツ帝国の宗教、文化、国家機構などを直接受け継いだ。後年モンゴル帝国に服従し、モンゴルの東洋文化を大量に受け入れたのである。モンゴル支配から解放されてビザンツが陥落した後、ロシアにとってヨーロッパが文明的なドナーになった。ロシアも日本も外国文化の要素を受け入れ、それらを現地化し、長期保存への志向を示している。時間が経つにつれて受容された外国文化の要素は民俗文化や民族意識のシンボルになってきた。このような過程は受容文明に共通するであろう。提供文明が過激的な変化を起こしたり、なくなったりしたあとでも受容文明は受け入れた文化を大切に保存したり、現地文化に解け合わせたりすることが多いようである。日本人は先祖の慣習や伝統等を重視し、過去のことを崇拝するといっているほど大切にしているのが知られている。現代の日本文化の根本的な要素は中国から、または中国経由でインドから受け入れられ、今日まで大事に保存されてきた。

この点からすれば、ロシアは日本に似ている。西洋学者の意見では、ロシアは受け入れた文化を提供側より熱心に守ったり、保存したりするそうだ⁴。ニコン総主教による17世紀の宗教改革は式典の形式的なものをビザンツの原型に戻すことを目指しただけだが、慣習的な儀式を変容しようとする試みは、信教徒の無数の悩みを伴う2世紀以上続いた宗教紛争と正教会の分裂をもたらしたのである。

外国文化の渡来は両国において均等速度でなく、波のような形で行われてきた。ドナー文明が変わったりはしたが、この過程は上代から現代までずっと続いたのである。両国において外国の文化は機械的に受容されるのではなく、土着の文化に重なったり、同化されたりした。ヤマトでは土着の文化は神道を中心とするものであり、古代ルーシでは原始的異教（多神教）を基にするものだった。土着の宗教意識は今日もロシア人と日本人の民族意識と行動パターンに重要な地位を占めている。日本人は宗教意識と冠婚葬祭による人生観で、ロシ

*Alexander Prasol [情報文化学科]

ア人は今でも外国人を驚かせるほど強い迷信や超能力への信仰でそれを裏付けている。だから文明のレベルにはロシアと日本民俗文化のアーキタイプにある程度の類似点が見られると言えよう。

文明より下位のレベルでも両国の民俗文化アーキタイプを特徴づける範疇に類似点が見られる。その一つは国家主義である。両社会においては国が重大な役割を果たすが、ロシア国家主義と日本国家主義には相違点が多く、以下にこのことについて詳細に述べよう。世界の国々に比べれば、愛国感情があまり高くないのはロシアと日本の共通点である。「自国民であることに誇りを感じている」比重は調査対象国全体の平均は84%だが、世界第62位のロシアは67.5%で、世界第71位の日本は54.2%である⁵。

両国の本来的な団体意識⁶は個人の利益より団体の利益、個人の権利より個人の任務を重視している。この点において、ロシアの社会意識と日本の社会意識とは西洋の団体意識・法意識と異なっている。結果として、両社会では個人の権利と個人の利益より社会の秩序と安全の方が評価を得ている。

ロシア人と日本人は一般的な世界観とものの考え方にも類似点がある。西洋文明の人々が人間社会や自然などを知覚するにあたって論理的な分析法を基盤にするのに対して、ロシア人と日本人は直感的認識と感覚的知覚を利用することが多い。両社会では順法主義より人間関係の調和と利害の調和が伝統的に重視されている。それで彼らは決定の正当さ、社会福祉の公平な分配などをとくに敬う。ロシア人も日本人もおかれた状態を積極的に変容するより自分を状態に順応させる志向を示している。ゆえに彼らの行動パターンには慎重深さや前例尊重主義がみられる。しかも断絶の多いロシア社会史が示してくれるように、ロシア人の代表的な集団行動には現況をそのまま保存し、問題が自然的に（場合によって爆発的に）解決されるという結末が多い。それなりの歴史的、地理的、気候的な原因があるが、ロシア人が長期で詳しい計画を立てるのは苦手であるという弱点が民俗文化の特徴である。それに対して日本人は長期的、詳細な計画を立て、その計画の実施を注意深く管理するのが得意である。

異なった民俗文化のアーキタイプの比較分析を行うには三つの分析レベルを区別しよう。それは1)文明のレベル 2)国の社会政治的組織のレベル 3)日常生活における個人の行動のレベルである。1)は当民俗文化を個別の文明として区分を可能にする特徴を対象とする。2)は当民俗文化の社会的政治的構造の特徴を対象とする。3)は日常生活における一般人の人間関係・世界観・ものの考え方などを対象とする。それらの三つのレベルが当民俗文化の中に一つにまとまり、互いに切り離しがたい状態にあるが、それらのレベルを論理的に区別することによって比較分析をたやすくすることができる。文明のレベルから日常生活のレベルに下がれば下がるほど両民俗文化の類似点が少なくなり、差異点が多くなるのである。文明のレベルでは、ロシア民俗文化と日本民俗文化がユーロ・アメリカ文明とはっきり異なるのに対して、社会・政治的レベルでは類似点があるとはいえ、相違点も少なくない。

上のところで両社会の主軸は国家主義にあると述べたが、両国の国家主義の本質にはかなりの違いが見られる。日本は集団のヒエラルキー（階層性）の社会をなしていると言う。集団のヒエラルキーの中では国が最上位を占めている。日本国家は防衛や外交関係はもちろん、社会福祉や教育や収入再分配などを管轄している。アメリカ人が言うように、日本では「国家が大きい」。

ロシアの国家も大きい、その社会的な機能にはだいぶ違うところがみられる。それらの違いは両国家主義が形成されてきた地理的、歴史的、社会政治的な条件の差異により定められるものである。太平洋戦争以前、日本国は外敵に侵入されたり武力による屈辱を受けたりすることは一度もなかった。モンゴル帝国は13世紀に日本列島への上陸を2回試みてきたが、失敗した。日本国が海外で軍事キャンペーンをやったのは3回だけだった。一つ目は663年に朝鮮半島出兵、二つ目は16世紀末に豊臣秀吉による朝鮮半島出兵、三つ目は20世紀前半にアジア諸国に対する侵略行為である。

17世紀初頭に戦国時代が終わり日本が統一したあと、江戸幕府は文武両道を奨励する方針を唱えた。鎖国時代の間、島国として国境を積極的に防衛する必要がなかった。幕府に服従しなかった東北の蝦夷部族に対する遠征が散発的に行われたとはいえ、あまり積極的ではなかった。日本が受け入れた孔子の教えによると君主の第一の課題は臣下の福祉向上であり、第二の課題は臣下の教育である。だから、君主または政府の指導活動を

評価するにあたって、国民と国家の繁栄で判断するのが普通だった。

ロシアは日本と違って近隣の遊牧民や定住民と頻繁に戦っていた。外敵に攻撃され、領土を奪われることも、逆に隣国を襲い、領土を拡張することも多かったのである。それによって国防機能はロシア国家の最大の課題になってきた。時間が経つにつれて広大な国土や臣下の多民族性や国境の移動性が国家の軍事的役割を固定し、それに国内秩序を守ったり国内抵抗を抑えたりすると言う警察的な役割を付け加えたのである。ある資料によると、10世紀から20世紀にかけてロシア史の3分の2は戦争時代に当たる。すなわちロシアは3年のうち、2年戦争をやったのである。それゆえにロシア人は統治者の指導活動を評価するに当たって二つの基準で判断することにしている。一つは、統治者が国土をどのくらい拡張させたか、もうひとつは、国家をどのくらい強化させたかというのである。ビョートル大帝とエカテリーナ2世がロシア最大の皇帝とされているのは偶然ではない。なぜなら、この二人の統治の時代にはロシアの軍事的勝利と国土の拡張がとくに顕著だったからである。有名な皇帝イワン4世（雷帝）の統治を言及すると、必ずと言っていいほど1552年のカザン・ハン国の征服と東方への進出開始を雷帝の最大業績としてあげる。

両社会史の軍事的アспектと国防政策における両政府の役割が違うところはもっとも対照的なものであろう。このアспектがその重要性のために両国の社会政治的生活のおびただしい差異を生み出している。たとえば、日本の民族性格と歴史意識にはできるだけ極端な行動や歴史の断絶を避ける志向が見られる。変化の激しい、移行的な時代には社会損害を和らげ、改革を順調に進めながら先へ行くのが理想的である。このような志向を裏付ける事例が多い。平安末期の武士が鎌倉幕府を成立させ、朝廷と貴族から政治・経済権力を奪ったが、生活ができるように正常な情況を作り出した。武将の平将門、源義朝、源義仲らは天皇の代わりになろうとはしなかった。首都から離れたところに新政権を樹立して、京都をそのままにしておいた。日本には7世紀以上実質的権力を握る幕府と象徴的権力を持つ朝廷が共存して、二重権力があつたと言えるだろう。1867年に江戸幕府最後の将軍徳川慶喜が大政奉還により将軍職を辞し、朝廷に政権を移行した。明治に入り趣味に生き、公爵として大正時代まで天寿を全うした。

ロシアの民族的性格は妥協不足であると言う。なので、政治的闘争で負けた方は勝利者の寛大が期待できることはめったにない。ロシア最後の皇帝ニコライ2世の悲劇的な運命はそれを裏付ける。1918年7月の皇帝一家の暗殺は例外ではない。政治的なライバルを絶滅する例は社会主義革命の後はもちろん、革命の前にもよくみられるのである。

日本人の行動にみられない、ロシア人に限った気質をもう一つあげよう。社会改革となるとロシア人は以前のもを完全に壊し、まったく新しい類を見ないようなものを作る志向を表す。ここ450年来、ロシア帝国の国境がすばやく移動し、ロシア人が新地を開拓することが多かった。新たに得た領土を居住地にするとときそれまでの経験を生かす可能性が限られ、受け継がれてきた知識より発明家のひらめきを必要とするケースが多かった。それに、ロシア人は長期にわたる単調な仕事が苦手なこと、短期間で爆発的な努力による問題の解決が得意なこと、極端な行動への志向などがその気質に大きく貢献しただろう。

以上に述べられた違いは社会の調和と社会の合目的性という理念に対するロシア人と日本人の態度が一樣ではないことにさかのぼる。日本民俗文化では社会の調和（和）が最高の価値である。聖徳太子の『憲法十七条』の第一項目には『和なるを以て貴しとし、忤ふることなきを宗とせよ』と書いてある。一方、ロシアでは社会の調和を守りながら損害をできるだけ少なくするより目下の必要性を優先的に思って行動する例が多い。武力闘争での非妥協性と徹底性がロシア人固有の気質とされているが、この気質は苦しい国防戦争を一度ならず助けてくれたと同時に、国内紛争を抑える上で支障となったことも少なくない。

1995年に世界の23カ国を対象に世論調査が行われた。質問には「政府がどちらを優先すべきか、社会の安全かそれとも個人の自由か」というのがあった。社会の安全が優先であると回答した比率はロシア人が42%、日本人が67%である。差はそれほど大きくないように見えるかもしれないが23カ国の内、日本は第2位、ロシアは第21位となった。

「社会を改善するために革命的な方法を使ったほうがよい」という視点に9.7%のロシア人（第7位）と2.7%の日本人（第22位）が同意した⁷。ロシアは20世紀に3次の革命、2次の世界戦争、国内戦争、大飢饉、大衆粛

清、ソ連解体などを体験した。日本には社会的な大変動としては革命と無関係である敗戦だけだった。それにしてもロシアでの革命的な改善方法の支持率は日本より4倍弱である。この数字は両民俗文化のアーキタイプの違いを明らかにするだろう。

以上に述べたように、両民俗文化のアーキタイプは農民共同体の美德や価値観を基盤にしている。しかし、両民俗文化が形成されてきた歴史的、地理的、気候的な条件の差異が顕著であるので、ロシア人と日本人の肉面的な世界の相違は類似より多いようである。以下に両民族の宗教観と集団主義について論じてみよう。

宗教観

ロシアと日本とは主宗教を外国から受け入れた。両国に外国から渡来した宗教文化が現地の主教に重なって現在は混合宗教意識をなしている。混合の程度は一樣ではなく、日本人の宗教感には神道、仏教、儒教、道教が混在しているが、ロシア人の場合は原始的多神教にロシア正教が重なっている。両民族の宗教観と宗教が社会生活に占める地位は異なっている。日本旅行ガイドにも書いてあるが、日本人が宗教信者のつもりでいるためには、時々お寺または神社に詣でれば十分である。日本人の宗教感の薄さ、宗教の信者であるための縛りはけっしてやかましくない。歴史的にみれば、日本社会の世俗政権と宗教政権とは別々だった。接点数は少数あったが、それらの点では教権が政権に服従したのである。仏教思想がその頂点に達した中世でさえ非宗教的社会生活に対するその影響はあまり大きくはなかった。中世時代の武將は学僧の知識を求めたが、インドと違って聖職者を賢人として敬って彼らの利益を守ることはなかった⁸。ヨーロッパとロシアでキリスト教権が所有した勢力は日本には見られない。16世紀末に世俗教育が宗教教育から分離して以来、ヨーロッパと対照的に道徳教育が教会ではなく学校教育の枠内で行われていた。

日本人の宗教意識は深さを欠くのだが、それは日本人の全体的な世界観の重要な気質をあらわしている。この気質は思考の功利主義と現実主義である。日本人は人間の実際の行動と人間関係を重視し、実生活から離れた抽象的なアイディアなどを扱うのが苦手な、そのようなアイディアに興味がないようである。宗教は人間の日常生活に役立てばどれもよいという態度が一般的である。日本では宗教活動を専門的に実施する宗教団体への信頼度がかなり低く12.5%にしか達しない⁹。この数字は世論調査の対象となった23カ国のうち最下である。

ロシアは正反対である。ビザンツ帝国同様、ロシアには宗教政権が形式的に世俗政権に服従することになった。しかし、日本と違ってロシア正教の社会的勢力範囲が広く、専制政権に協力して社会を司る役割を果たした。皇帝でさえ正教会の勢力を無視できなかったのである。皇帝の洗礼式、戴冠式、結婚式などが総主教によって行われ、式典も教会によって決められた。「ツァーリの権威は神様から授けられたものである」という信仰があったので、ロシア正教会はツァーリ政権の決定を国民の前で合法化する役目も果たすべきであった。ツァーリに続いて正教会は二番目の土地の所有者であり、膨大な富を持ち、社会の動きに必然的に参加することになった。ロシア人は昔から信仰深い人を「神様の人」といい、信仰心を最高の美德としたのである。ロシアでは信仰心の程度で君主を判断する慣習がみられ、諸問題を解決するには神様に熱心な祈りをささげることが最良であると思われた。ロシア語で「正教」ということは「(神様を)正しく褒め称えること」を意味する。

1917年に革命を起こしたボリシェヴィキはロシア人の信仰心を利用することにした。正教会が抑圧され、共産党が取って代わった。キリストの教えのかわりに共産主義イデオロギーが人々の意識に浸透させられるようになった。しかもこのイデオロギーはキリストの教え同様、永遠で無敵なものであると国民に教えた。革命の父レーニンの遺体を昔の聖者や殉教者のようにミイラにして首都の中心にある廟に安置し、大衆の参拝を奨励する政策を宣言した。至る所でイコン(聖像画)がレーニンの肖像画や彫刻に取って代わられ、国家・公共・文化・教育施設では共産主義象徴ぞろいのいわゆるイデオロギー教育コーナー(красный уголок)が設置されるようになった。ソ連共産党がある程度正教会のソ連時代の継承者であると思える。正教と共産党の最終的な目的は異なるが、社会教育法が一樣である。

70年以上行われた徹底的な無神論社会教育にもかかわらずロシア人の宗教感が消えてしまったわけではない。最近の世論調査によると、総人口の54%は正教の信徒のつもりでいる¹⁰。ロシア正教会は全人民の61.9%の信頼感に恵まれている¹¹。現代のロシア社会ではこれより高い信頼度を所有しているのは軍だけである。不

信仰者のなかでもロシア正教が民族文化の宝物で大切に保存すべきだと思う人々が多い。最近、社会政治生活における宗教の地位がじょじょに高まり、ロシア正教が革命前と同様に国教になりつつあると言えるだろう。為政者や政治家が競い合って正教への忠誠を誇示することによってこの過程が加速されている。

集団主義

現代の西洋民俗学の視点からみればロシアと日本は集団主義文化圏に属する。しかし西洋個人主義の基準をさておくとすれば、両国の民俗文化は違いが多く同種であるまい。

ロシアの集団主義は日本と同じく村民の意識にさかのぼる。20世紀初期までは農民がロシア総人口の90%をなした。農民の共同体は多種多様で名称もいろいろあった（**задруга, община, мир, собор**, のちほど **артель, колхоз**）。ロシアの農民共同体の特質として土地を含めて生産手段の共有、共同労働、労働所産の正当な分配をあげられる。ロシアの哲学者ニコライ・ベルジャエフが指摘したように、ロシアの集団意識は共同労働能率の向上よりは利益の正当な分配にこだわる。農民共同体の正義感は富の多いところから富の少ないところへのものの移動を原則として認めた。それゆえに人間の平等、親近、権力と国富の再分配を唱えた少人数の革命家たちが1917年に数百万人の労働者と農民から大量な支持を得ることができた。

ロシアの農民共同体のもう一つの特徴は個人の自由が大いに拘束されることにある。村民は家長と村長の許可なしで共同体を出ることができなかった。のちに都市に出稼ぎに行きアルテル（**артель**）を作った農民たちもこの規則に従ったのである。1861年までのロシア農奴制が1930年代にソビエト政権のもとで復活した。コルホーズ員になったソ連の農民たちはコルホーズ長の管轄した事務局に身分証明書を預けさせられ、コルホーズ長の許可なしでは村を出ることができなかった。20世紀の半ばごろのソ連では移動の自由が厳しく制限されたのである。

農民の会議で決議をとるには伝統的にコンセンサス（意見の一致）が必要で、コンセンサスを得た決定は全員にとって義務的なものだった。少数人の権利を保障する制度がなく、意思や意見の不一致が現れた場合、みんなの利益を損なうものとみなされた。これが後年広く知られるようになったソ連社会の全体主義、反体制的思想の圧迫、「人民の敵」に対する粛清等の原因である。亡命はもちろん、国家の許可なしで外国人との接触さえ全国的な規模に達した共同体の裏切りとみなされるようになった。宗教感と同様、集団主義においてもソビエト政権が政治目的のために伝統的な農民共同体の道德価値を利用したと言えるだろう。

ロシアの農民共同体ではみんなが平等で親近感があり、全員がそれぞれの人のことを何もかも知っている。みんながいっしょに仕事をしたり、助け合ったり、簡単に私的なことを打ち明け合ったりする。目上の人が目下の人を戒めたり、同世代のものに抵抗感なく注意したり用心させたりすることも珍しくない。これらの気質は現代のロシア人の行動パターンにもみられる。都市圏人と言っても、村を離れて都市圏に住む世代数は二つか三つしかない。歴史的にみれば、短期間である¹²。現代の西洋都市圏人が慣れてきた精神生活様式（個人の独立、自主性、不可侵等）は首都圏を除いていまだにロシア人の民俗意識に根付いていないようである。

日本の集団主義はロシアと同様、村民の意識にさかのぼるが、それなりの異質性を持っている。ロシアと違って日本の社会集団は非公開で閉鎖されている。すなわち個人は集団から切り離せない存在のつもりであり、自分の利益と集団の利益を区別しない。戦前の日本ではほとんどの社会集団が閉鎖的だったが、現在は閉鎖性がじょじょに弱まっていく。

ロシアと違って日本の集団は階層組織で、団員の地位が年齢や入団時によって決められる。内部の規則が外部の規則より重んじられ、外部に出されたり討論されたりすることはない。集団の内部規則の優先は昔に孔子の教えによって成立した。江戸時代には他人による犯罪を密告する義務があったが、家長が法律を犯した場合、家族のものは口外しなくてもよかったのである。現代の日本には政治家や官公吏等の汚職事件が少なくないが、他国に比べて集団の利益の比重はるかに高い。

日本の集団で決議をとるには全員が参加する討論会が不可欠であり、根回しという。ロシアと同じくコンセンサスに達しない限り決が取れない。官庁や会社等で重役が主管者と相談せずに決定をとることはめったにない。主管者が決議案を回付し、関係者の承認を得るのが普通である。この制度は稟議制という。日本の集団は

問題を検討したり審議したりする時も、とった決定を実現する時も全員に獅子奮迅の努力を求める。成功をおさめるのに必要な時間や努力より最終的結果を重視することが多い。だから日本人の集団活動は成功率が高く、必要以上の努力を求めるという特徴を挙げられる。明治末期の日本の学校教育を研究したN. I. コンラッドが指摘したように、日本の学校教育は質が高くなるが、教育者が組織で縛りすぎ、好結果のわりに学校教育実施への努力や支出が必要を上回るものである¹³。

最近、ロシアの行政・公共機関や会社の指導部が以前の農民共同体の集団主義を捨て、西洋風の単独責任・単独指導制を導入するようになってきているが、日本の方が集団主義の伝統を生かしているようである。

全体的に言えば、日常精神生活のレベルでロシア人と日本人との差異は共通点より多いように見える。それは両民俗文化が形成されてきた歴史的、地理的、気候的な条件の違いによるものである。ロシア人はおおらかな人柄の持ち主で、スケールの大きいものに憧れるのに対して、日本人は小さくて優雅なものに引き寄せられる。革命前のロシアと革命後のソ連は世界スケールの社会的・経済的・技術的な実験で知られている。日本文化は逆に山川草木を小規模化した庭や盆栽や世界最小の機具等々で有名である。

ロシアとソ連は一度ならず世界史の大規模な動きに巻き込まれた。モンゴル軍による敗北、オスマン帝国に対する勝利、1917年の世界最初の社会主義革命、第二次世界大戦での勝利、冷戦時代の米国との競争、ソ連解体などがそれらの例である。ロシア史において世界規模の動きが多かったからこそ、ロシアの民族主義は国外に向けられた、メシア主義的なものとなった。18世紀初頭にロシアでは他国に影響を与えられる世界の大国としての民族意識が高まりはじめ、1917年以降さらに強まり、現在にいたるものである。

世界の経済勢力になった日本はここ20年来、民族文化を海外にもっと紹介するような政策を覚え始めている。この面においてかなりの成果が上がっているとは言え、東南アジアの諸国がこの政策の主対象であるので、日本は世界的ではなく地域的なリーダーになるつもりであるようだ。戦後の日本の民族主義はロシアの民族主義と違ってメシア主義を欠き、本質的に内面的なものである。日本の民族主義は人民の統一と単一性、文化の伝統主義と独特性に支えられている。日本は20世紀前半に大規模な出兵をおこなったが失敗に終わり、日本の首脳部が複雑な国際情勢の中で行動するのは得意でないことを明らかにした。日本文化の研究者の意見では日本人は比較的単純で象徴的なものを好み、複雑な理念や抽象的な範疇等が苦手である¹⁴。中村元氏が指摘するように、他民族に比べて日本人は正直で、忠実で、単純な生格をもっている。彼らは複雑な政治的または外交的な取引があまり好きでない。昔の学者は神の道そのものが単純で正直であることにあると書いた¹⁵。

ロシア人は天性がおおらかであると言う。極端なことや対照的なことを好み、少しでも儲ければ金に目をつけずゆとりある生活に没頭するロシア人が多い。ロシア語の使用頻度の高い表現には、楽しむのなら無制限に、水遊びなら寒中水浴、恋人なら女王など、ロシア人の価値観を明らかにするものがある。精神的な刺激があれば、ロシア人ができないことはほとんどないと言われる。刺激のない、単調で機械的な仕事が彼らの苦手である。

この点について日本人の民族性と価値観は正反対である。できるだけ極端なことを避け、自己の喜怒哀楽の情を統制し、徹底的で落ち着いた仕事振りが美德とされる。日本では他人に迷惑をかけないことが最大の要求であるが、ロシアでは二の次である。ロシア人と違って日本人は長期計画を立て、それを徹底的に実現するのが得意だが、前もって予見できない状態が苦手なことを避けるようとする。

会社での会議はともかくとして、日本人は論争嫌いである。相手を説得するために一方的に話しをすることはけっして日本人の好みではない。日本の民俗文化の熱心な擁護者本居宣長が書いたように、日本では神代以来、道のことさえ論じ争うことはなかった。宣長の意見では他国に論争がよくみられるが、それは時間の無駄遣いに過ぎず、日本はまねるべきでない¹⁶。

紛争が起こりかねない状態になると日本人は主張を通すよりその場を離れ、可能な限り妥協への道を探ってみるのが普通である。ロシア人を含めて日本人の行動パターンに詳しくない外国人にとってはここが誤解しやすいところである。論争しないことを知的無能として受け止めたり、自己感情の統制を無情または無関心として受け止めたりしかねない。逆に日本人はロシア人がどんなことに対しても自分の率直な意見を出す覚悟に驚く。本音と建前を区別しない民族だと思いがちの日本人だが、ロシア文化においては本音と建前のちゃんと

した区別が必ずしもいいことでなく、むしろ好ましくない、二面のある人柄として受け止められる。

日本人の目ではソ連時代のロシア人が1)辛抱強さ 2)陽気 3)楽観主義 4)質素 5)愛国主義という気質を有する。人間関係にはあつかましいところが見られ、日本の礼儀作法に即していない¹⁷。ロシア人からすれば日本人は1)勤勉 2)付き合いがよく 3)几帳面で 4)控えめな民族である¹⁸。それらの気質は具体的な状況によって表面に表される意味でなく、気質本来の対象の意味として捉えなければならない。なぜかと言うと、同じ気質は状況によって異なった性質や行動の基になりうるからである。たとえば、日本人が細かいことに注意を払うのは周知の事実だが、それは状況によって日常生活での詳細なことに対するいやなこだわりとして表れうるし、手工芸におけるすばらしい完璧主義としても表れうる。複雑で抽象的理念が苦手なことはアメリカ人からすれば知的無能だが¹⁹、日本人からすれば「思考の節約」である²⁰。またロシア人は天性がおおらかだからこそ、寛大で気前のよいこともあれば、あつかましくてだらしなくなることもある。

日本人の美德・悪徳の評価はいったいどんなものであろうか。日本人の美德のベスト5は親切、根性、品行方正、まじめ、無欠勤ということになる²¹。日本人はその勤勉で知られているが、親切が勤勉より、品行方正がまじめより評価を得ているのは注目される。

これに対して、最悪徳にはシンナー遊び、ごますり、フリーセックス、無関心、個人主義がある²²。

全体的にみれば、ロシアの民俗的性格と日本の民俗的性格にはユーロ・アメリカの西洋文化と異質であるという共通点があるとはいえ、対照的な差異点の方が多いようである。ロシア人の目を引くのは複数の対象で、日本人の目は単独のものにとまる（森林と個別の木を例に挙げる）。ロシア人は目が遠く地平線を大事にするのに対して、日本人はなにより足元を大切にする²³。ロシア人は枝葉末節に触れないで本質を問題とすることが多いのに対して日本人は細部を重視するのが普通である。ロシア人は独創的な考え方をしたり意味深い討論や論争をしたりするのが得意だが、日本人は実際の活動の方が上手だ。ロシア人は感情を込めた、即興的な行動を求める状態を精神的に好むが、日本人はきょうめんで入念な作業をうまくやりとげる。ロシア人が自分のものを困っている人に簡単にあげる代わりに他人のものも無断で借りたりすることに日本人は驚く。ここに両文化の行動パターンと美德の違いがはっきりしているだろう。両方に文化的ステレオタイプが多く、相互理解も不十分である。

日露交流史は150年を越えているが、不親善関係の時期が長く、現在両国の相互評価のアンバランスを生み出している。全ロシア世論調査センター（ВЦИОМ）とレワダ・センター（Левада-Центр）が2005年後半に行った世論調査によると、66%か72%のロシア人が日本に対して親近を感じ、18%か16%が友好的な感じを持っていない²⁴。日本での世論調査の結果は正反対である。ロシアに対して親近を感じる日本人は16%で、非友好的な態度は78%を占めている²⁵。このアンバランスにはそれなりの理由がある。戦前はともかくとして、戦後の冷戦時代には両国のマスコミが互いに敵国のイメージをつくりだしていたのが周知の事実である。ソ連は日米安全保障条約、日本は北方領土返還を問題にして対立した。ソ連崩壊後、前者は深刻さを失ったので、ロシアのマスコミは日本に対する敵意をはぐくむことをやめたが、後者は残って、日本のマスコミは冷戦時代と変わりなくロシアに対する敵意を育て続けている。

理由はもう一つある。それは自国のメディア信用度の差である。両国の新聞・雑誌・テレビを「非常に信頼する」あるいは「やや信頼する」比率を見れば、ロシアは37.6%で、日本は67.7%である²⁶。したがって冷戦時代にも世論に対するソ連のマスコミの影響はそれほど大きくなかったのに対して、現代の日本ではマスコミの否定的な影響がだいぶ大きいと言える。

両国間の最大の問題である北方領土問題が解かれても相互理解不足やステレオタイプの悪影響を克服するのにしばらくの時間がかかるだろう。ここはプロフェッショナルとして相手国の国内事情や民族文化等をよく知っている文化人、学者、教育者の責任が大なるものである。

注釈

¹ В. В. Кожевников. Противоречия между личностью и государством в двусторонних отношениях между Россией и Японией// ロシア極東地域の総合的分析-現状と展望 16回日露極東学術シンポジウムの

記録 日露極東学術交流会 2001年 100-105頁; А. С. Дыбовский. Ритуал и игра. О некоторых особенностях речевой коммуникации в японском и Русском этноязыковых коллективах (в печати). [Электрон.ресурс]. Режим доступа: <http://russia-japan.nm.ru>; А.Н.Мещеряков. Японский император и русский царь: элементная база. М.: Наталис Рипол Классик, 2004. .

² 寺谷弘壬、日本人とロシア人—ここが大違い 文春ネスコブックス 1990

³ А. Дж. Тойнби. Цивилизация перед судом истории. М.: Айрис Пресс, 2003. с. 54-55.

⁴ Yale Richmond. From Nyet to Da. Understanding the Russians. Intercultural Press Inc., 1986. p. 33

⁵ 高橋徹著 日本人の価値観・世界ランキング 中央公論新社 2003 72-74頁

⁶ ロシア語では共同体の名称にザドルガ (задруга)、ミール (мир)、ソボル (собор)、オブシチナ (община) などがある。

⁷ 世界23カ国価値観データブック 同友館 1999年 22頁

⁸ H. Nakamura. The Way of Thinking of the Eastern People. Greenwood Press, 1960. p. 456.

⁹ 世界23カ国価値観データブック 同友館 1999年 95頁

¹⁰ А.В.Сергеева. Русские. Стереотипы поведения, традиции, ментальность. М.: Флинта Наука, 2006. с. 188.

¹¹ Yale Richmond. From Nyet to Da. Understanding the Russians. Intercultural Press Inc., 1986. p.30.

¹² Ibid., pp.14-15, 35.

¹³ Н. И. Конрад. Современная начальная школа в Японии // Из журнала Министерства народного образования. Спб.: Сенатская типография, 1913. с. 156.

¹⁴ Yukawa Hideki. Modern Trend in Western Civilization and Cultural Peculiarities in Japan // Essentials of Japanese Philosophy and Culture / Charles A. Moore. Tokyo, Charles E. Tuttle Co. 1967. pp. 56-59.

¹⁵ H. Nakamura. The Way of Thinking of the Eastern People. Greenwood Press, 1960. p. 499-500.

¹⁶ Ibid., p. 471.

¹⁷ 寺谷弘壬 日本人とロシア人 ここが大違い 文春ネスコ 1990年 28-33頁

¹⁸ 同上、35-37頁

¹⁹ Charles A. Moore. The Enigmatic Japanese Mind // The Japanese Mind. Essentials of Japanese Philosophy and Culture. Charles E. Tuttle Company, 1967. pp. 290-291.

²⁰ 竹内靖男 日本人らしさとは何か PHP文庫 2000年 72頁

²¹ 日本人の価値観 / 日本地域開発センター編 至誠堂 1970年 15頁

²² 同上、15頁

²³ А. Н. Мещеряков, М. В. Грачев. История древней Японии. Санкт-Петербург: Гиперион, 2002. с. 24.

²⁴ ВЦИОМ. Пресс-выпуск № 342 от 21.11.2005. Левада-Центр. Пресс-выпуск, август 2005.

²⁵ Mansfield Foundation. Asian Opinion Poll Database, October 2004.

²⁶ 高橋徹 日本人の価値観・世界ランキング 中央公論新社 2003 189-191頁

参考図書

1. 世界23カ国価値観データブック 同友館1999年

2. 高橋徹 日本人の価値観・世界ランキング 中央公論新社 2003

3. 竹内靖男 日本人らしさとは何か PHP文庫 2000年

4. 寺谷弘壬 日本人とロシア人 ここが大違い 文春ネスコ 1990年

5. 日本人の価値観 / 日本地域開発センター編 至誠堂 1970年

6. Mansfield Foundation. Asian Opinion Poll Database, October 2004.

7. Moore, Charles. The Enigmatic Japanese Mind // The Japanese Mind. Essentials of Japanese Philosophy and Culture. Charles E. Tuttle Company, 1967. pp. 288-313.

8. Nakamura, Hajime. The Way of Thinking of the Eastern People. Greenwood Press, 1960.
9. Richmond, Yale. From Nyet to Da. Understanding the Russians. Intercultural Press Inc., 1986.
10. Yukawa, Hideki. Modern Trend in Western Civilization and Cultural Peculiarities in Japan // Essentials of Japanese Philosophy and Culture / Charles A. Moore. Tokyo, Charles E. Tuttle Co. 1967. pp. 52-65.
11. ВЦИОМ. Пресс-выпуск № 342 от 21.11.2005.
12. Дыбовский А. С. Ритуал и игра. О некоторых особенностях речевой коммуникации в японском и русском этноязыковых коллективах (в печати). [Электрон.ресурс]. Режим доступа: <http://russia-japan.nm.ru>
13. Кожевников В. В. Противоречия между личностью и государством в двусторонних отношениях между Россией и Японией // ロシア極東地域の総合的分析—現状と展望 16回日露極東学術シンポジウムの記録 日露極東学術交流会 2001年 100-105頁
14. Конрад Н. И. Современная начальная школа в Японии // Из журнала Министерства народного образования. Спб.: Сенатская типография, 1913.
15. Левада-Центр. Пресс-выпуск, август 2005.
16. Мещеряков А. Н. Японский император и русский царь: элементная база. М.: Наталис Рипол Классик, 2004.
17. Мещеряков А.Н., Грачев М.В. История древней Японии. С.-Петербург: Гиперион, 2002.
18. Сергеева А.В. Русские. Стереотипы поведения, традиции, ментальность. М.: Флинта Наука, 2006.
19. Тойнби, А. Д. Цивилизация перед судом истории. М.: Айрис Пресс, 2003.